リフォームをめぐる人々 ⑪

月1回掲載

三井のリフォーム 住生活研究所 所長　西田恭子

帰りたくなるような家

ある雑誌社から取材を受けたおりに、ライターの女性から「プライベートな質問ですが、帰りたくなるような我が家にするには、どうしたらいいでしょう?」と聞かれた。一人暮らしのワンルームで、時間も不規則、待ち人がいない我が家では、ついつい仕事をし続けて、帰るタイミングも失うのだろう。

セラピストでもない私は、困惑しながらも「部屋に入った時、一番最初に目に入る場所を、お気に入りの空間にしては?」と答えた。

「目に入るのはベッドです」と、その女性は言う。

それならベッドカバーを素敵なものに変える、ベッドの側面の大きな壁には、一つだけ好きな絵を掛けるなど方法はある。

ベッドといえば、「自分の部屋が大好き!」と言っていた中学生の娘さんがいて、タイから両腕に抱えて持ち帰った、大きなゾウのぬいぐるみがベッドを占領していた。

リフォームの時、男性の場合は、なぜか畳にこだわる。「どこかに畳を!」と真剣な口調で話される。そこで何をしようというのだろうか? 読書? 写経? おそらくただごろんと寝転びたいのだろう。その話には知らん顔をしている奥様を横目に、さらに畳部屋を熱望する。大きなお座敷をイメージしているわけではない。「たとえ四畳半でも、三畳でも…。コーナー畳でも、置き畳でもいいです」と、だんだん譲歩しながらも訴える。

〝いやし〟の空間づくりは、人さまざまだが、それだけに何が好きか? が問われる。好きなものをシンプルにセットするのがポイントだろう。好きだからといって沢山そろえすぎて、それがまたストレス空間になっている例も多い。家具も〝空間づくり〟に欠かせないが、リフォームの時には、残す家具をどれにするのかが問題になる。高価かどうか、新しいかどうかで決める場合も多いが、その家具が、我が家の居心地を決める重要な役割を担っている事を忘れてはいけない。

捨てる決心が付かない方には、捨てる基準を決めるのではなく、残す基準を決めるのがコツだと話す。日々必要なものか? 思い出も含め、これから一生持ち続けたいものか? その両方から優先順位を決める。

リフォームしてから二、三年たって、その後の暮らしぶりをお伺いしに行くと、驚くほど変わらずに生活されている。リフォーム時に、生活をしっかり見据えて再スタートを切ったからだろう。

日々の暮らし方の動線や収納を見据えて作り上げるリフォームは、手作り感があり、自分の作品としてオンリーワンの居心地のいい我が家となっているようだ。

西田恭子氏のプロフィール＝一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手がけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。文化女子大学非常勤講師。日本女子大学住居学科卒。